

早稲田大学における編纂事業のこれまでとこれから

——『早稲田大学百五十年史』にむけて——

真 辺 将 之

はじめに——自己紹介をかねて

ただいまご紹介にあずかりました、真辺と申します。この部会（全国大学史資料協議会東日本部会）には初めて顔を出させていただきましたので、まずは自己紹介から始めさせていただきたいと思います。現在私は早稲田大学の文学部という箇所（※）に所属しているわけですが、この文学部というの、聞きなれない名称だと思います。具体的に申しますと、文学部と文化構想学部、大学院文学研究科の三つの組織を統括している部署が、この文学部になります。

その中で、特に私は文学部日本史コースと大学院日本史学コースに所属して、日本の近現代史を教えているわけですが、実は二〇一〇年度までは同じ学内の大学史資料センターの方に勤務しておりました。大学史資料センターとの

かわりは、一九九八年にアルバイトとして入ったことが最初になります。当時、高田早苗研究部会というのがセンターの内部に設置されておりまして、後でまた紹介させていただきますけれども、その部会の研究成果として論文集と著作集を作ろうという計画を立てていました。それで、私はその研究部会のための史料集めのアルバイトとして雇われたわけです。高田早苗が書いたものを、原本で集められるものは原本で、無理なものはコピーという形で集め、それと同時に著作目録や年譜、関係文献目録などを作るという作業をしていました。集めたものは研究会の先生方の利用に供するとともに、そのうち主要なものを著作集にする予定だったのですが、結局予算の問題もあって著作集の方は実現しませんでした。ただ、研究会の成果としては、研究論文集として『高田早苗の総合的研究』を出すことができました。このような形で、研究部会の下つ端役として、かわりを持ったのが最初です。

そのあと二〇〇一年から非常勤嘱託という立場になり、高田早苗研究部会の主担当となりますが、いったん二〇〇三年三月に退職します。これは日本学術振興会の特別研究員に採用されたためで、その特別研究員の任期が切れたあと、また二〇〇六年に再び非常勤嘱託という立場で、今度は『大隈重信関係文書』の編集担当として、センターに勤務させていただくことになりました。『大隈重信関係文書』は、おかげさまで昨年度完結、全一一巻を出し終わりましたが、私はその四巻から七巻までの編集に携わりました。身分としては二〇〇九年から助手という立場になり、『大隈重信関係文書』の編纂に加えて、『早稲田大学百五十年史』編纂の準備作業や、大学役職経験者の方々へのオーラルヒストリーにも携わりました。そして二〇一一年から文学学術院に職を得て、センターからは離れることになったという次第です。

以上のように、センターに携わっていた期間は長いのですが、その間、立場がころころと変わっています。そしてこれ自体が大学史資料センターの抱える課題なのです。つまり、専任の研究者がおらず、任期付きの若手の助手・助

教・非常勤嘱託、そしてアルバイトの方々によって業務を行っている状況がありまして、『早稲田大学百五十年史』の編纂が今年度から始まるわけですが、こうした人員体制が、編纂における最大の障害になっているという問題がございます。

二〇一一年度からはセンターを離れましたが、その後も『百五十年史』の編纂専門委員会と編纂委員会の二つに関係しております。専門委員会というのは、実際の執筆内容にかかわる事項を中心に議論する委員会、編纂委員会というのは、その一段階上の、全学レベルの合意調達のための委員会になります。

今年度から本格的に、この『早稲田大学百五十年史』の編纂が始まるわけですが、大学史に関わってきた際の見聞をふまえながら、これまでの早稲田大学の編纂事業としてどのようなものがあり、そこにどのような問題点があるのか、そして今後、『百五十年史』を執筆する上でどういう課題が存在するのかということを、お話しさせていただきます。

ただ、私自身も本格的に年史編纂に関わった経験はありません。むしろお聞きなっている先生方の方がお詳しくあったりすることもあるかと思えます。ですので、そのような点がございましたら、ぜひ私の話の後で、いろいろとご教示いただければと思います。

一 前提としての「周年事業」

まず前提として、「周年事業」というものについてちょっとお話ししたいと思います。というのも、そもそも年史編纂というものが、周年事業に伴って行われるようになったという事実があるからです。今ではどの大学でも盛大に

創立何十周年、一〇〇周年といったような事業を行うのが当たり前になっていきますけれども、早稲田大学の場合、他の私立学校に先駆けて盛大な記念事業を行ったという歴史的事実がございます。今いろんな大学で行われている盛大な周年事業を最初に行ったのが早稲田大学だというふうに言われているのです。

こんなことを私が言うと、なんだ自画自賛の過大評価じゃないかと受け取られるかもしれませんが、幸い今ここにいらつしやいます村松玄太先生が、明治大学史資料センターの方で発行されている雑誌に、いろいろな大学の周年事業を取り扱った論文を書かれておりまして、その中で、「規模からみても、事業内容からみても、早稲田大学の周年事業は現在の教育機関における周年事業の要素を備えており、いわば周年事業の祖形とみることができ」という評価をされていらつしやいます（村松玄太「近代日本の大学における周年事業の発生と展開」、『大学史活動』三一、明治大学大学史資料センター発行）。ですので、早稲田の私が自画自賛して言っているのではなく、客観的に見てそういうことだと考えていたのだと思います。

例えば、今、『読売新聞』の戦前の記事をデータベースで検索して閲覧することができまふけれども、これで早稲田よりも歴史の長い慶応義塾の周年事業について検索してみますと、出てくるのは一九〇七（明治四〇）年のものが最初です。もちろん、それ以前にも、慶応で記念行事を行った事実自体はあるようなのですけれども、新聞などで報道されるレベルの大規模なものとしては一九〇七年まで行われていなかったということが分かるわけです。

それに比べて早稲田の場合、検索をかけますと、もっと早い時点から出てきます。それも、創立わずか五年目の一八八七（明治二〇）年から、大運動会・演説会というイベントとして、周年事業を行ったという記事が出てくるのです。ついで一八九二年に創立一〇周年の祝典や園遊会を行い、一八九七年には創立一五周年祝典をこの年の卒業式と同時に行いました。この一五周年の時は特に大隈重信が学校の公式行事で初めて演説し、「諸君は必らず失敗をする」と

という言葉で有名な名演説を残しました。さらに、その次の開校二〇周年の記念事業は、特に盛大に行われました。というのも、この創立二〇周年に際して、それまで「東京専門学校」と称していた本学が、「早稲田大学」と名前を変えるわけです。もちろん名前は大学と称していても、法的には、それ以前同様の専門学校であったのですけれども、たとえ自称であっても「大学」と名乗ったということは、その名前に値するだけの設備とカリキュラムを備えるに至ったのだという自負がありました。それで、この時に「開校二十周年・早稲田大学開校記念祝典」という名で、三日間をかけた大規模な祝典を行ったのです。この時の祝典は、単に大学だけではなくて、周辺地域なども巻き込んだ一大イベントとして行われまして、七千人の参列があったといえます。伊藤博文が祝賀演説に来て、その演説が大隈に対して自らの不明を謝った「懺悔演説」であるなどと言われたりもしたわけですが、この二〇周年の時に、初めて年史も編纂されることになります。その書物にはこの祝典の模様についての記述も含めることにしたため、実際に刊行されたのはこの祝典の翌年でした。もちろん、これ以前にも年史的なものが全くなかったかというところ、いくつか小さいものはあることはあるのですが、本格的なものと申しますか、公的な冊子としてそれなりのボリュームを持つて出版されたものは、この時が初めてということになるわけです。

そのあとも一九〇七年には創立二五周年記念祝典が行われ、この時の事業では早稲田大学開校に続く第二期計画ということで、理工科の設置が行われます。また一九一三年には、明治天皇崩御により一年延期された創立三〇周年の祝典が行われ、その後も節目の年には周年事業が行われていくことになります。さきほど慶応義塾が一九〇七年になつてはじめて大規模なものを行ったと申しましたが、それ以外の学校の周年事業も、こうした早稲田の周年事業に範を採って大規模に行われるようになっていったのでした。

では、なぜ早稲田大学はこうした周年事業を積極的に行ったのでしょうか。それは一つには、今と同様に、そこで

学校の宣伝を行ったり、あるいは募金活動を行ったりして、大学の拡張につなげていこうという目論見があったわけですが、それだけではない、もう一つの重要な要素がありました。それはどういふことかというところ、その周年事業をきっかけに、大学のアイデンティティを確立していこうと強く意識していた、ということなのです。これは、周年事業ごとに大学のシンボルとなるようなものを定めているということからも、明らかなのです。一九〇二年の二〇周年の際には校章を定め、一九〇七年の二五周年の時には校歌を作り、そして、三〇周年の時には大学の教育理念を示す「早稲田大学教旨」や大学の校旗を制定しているのです。また学校の周年事業とは別に、創設の際に中心となつてその実務を担つた功労者であり、その後若くして亡くなつた小野梓という人物を追悼する記念式典も、定期的に行われています。これもまた、学校創設の功労者を追懐することによつて、建学の精神の延長線上に大学としてのアイデンティティを確立していこうという意識のあらわれであると思われるのです。

ではなぜそういうアイデンティティの確立が必要だつたかといいますと、さきほど二〇周年に際して東京専門学校が早稲田大学に改称されたということを申しましたが、この大学への改称にともなうカリキュラム変更のなかに、実は、創立時に掲げていた「学問の独立」という理念と矛盾しかねない要素があつたのです。そもそも、「学問の独立」というのには二つの意味がありまして、一つは政治権力からの独立という意味でしたが、もう一つの具体的な意味としては、外国の学問からの独立、つまり日本語で教育を行うという理念があつたわけです。これは、東京専門学校が設立された頃、たとえば東京大学が日本人講師であつても英語で授業を行い、また慶応義塾などの私立学校も英書を教科書として用いているなど、英語力がないと専門的な学問を学べない状況だつたということがありまして、そうしたなかで、英語学習に時間を割かずとも、日本語だけで専門的な学問を学べるようにしようということから、東京専門学校が創立されたわけです。

しかし、創立当時から、将来的にはこの東京専門学校を大学に発展させたいという明確な意識が、創設にかかわった人たちの間にはありました。開校式の演説で、さきほども触れた小野梓が、いつかはこの学校を大学へと発展させたいと、明確に言っているのです。ただ、当時の状況の中で、学校を大学並の内容を持つものにするということになると、日本語で書かれた参考書だけでは不十分なわけです。つまり、英書がある程度使いながら授業を行わなくては、本当に高度な学問は教授できないし、西洋の学問の発展にも付いていけないという状況にあったのです。ですから、早稲田大学と改称するに際しては、大学に進むための前段階として予科を設置し、そこで英語教育を行うようになるわけです。

そうなる問題となってくるのが、それでは早稲田大学は帝国大学と何が違うのかということです。このことは、早稲田大学への改称が決定する以前に、東京専門学校機関誌の中でも議論が闘わされておりまして、英語教育を必須にして大学へと発展させていくことが、東京専門学校を帝国大学の劣化版のようなものにしてしまうことにつながるのではないかという危惧が、当時の学校関係者のなかに強くあったようなのです。そうしたなかで、帝国大学と早稲田大学とはいったい何が違うのかということを打ち出していく必要性があったのです。その結果が、周年事業における、こうした学校のアイデンティティ確立の動きにつながっていったと考えられるわけです（真辺将之「東京専門学校における接続問題と大学昇格問題」、『近代日本研究』三一、慶応義塾福沢研究センター発行）。創立三〇周年の時に作られた「早稲田大学教旨」という、学校の教育理念を示すものがあるのですが、これは具体的には、創設期の「学問の独立」という理念に、「学問の活用」「模範国民の育成」という二つの理念を付け加えたものなのですけれども、特に「模範国民」という言葉を使っている部分に大きな意味がありまして、帝国大学が官僚などのエリートを育成する学校であるのに対して、早稲田大学はそうした一部のエリートではなく、あくまで国民の側に立つ、国民のリーダー的な存在

となる人物を育成するのだ、これこそが帝国大学と早稲田との違いなのだという、そういう意識があったわけですから。年史編纂というものも、以上に述べたような、学校のアイデンティティ確立の作業の一環として行われるようになったのでして、つまり、早稲田大学というものの存在意義がどこにあるのか、大学のアイデンティティがどこにあるのかということを再確認しようという意識が、初期の年史編纂、あるいは編纂事業というものには存在していたということができなのです。

二 編纂事業のこれまで

このようにして始まった編纂事業ですが、それではこれまでどのようなものが編纂されてきたのかということを見ていきたいと思います。私もこれまで、そうした編纂物については、必要に応じて必要な箇所だけ見るといような感じでパラパラと見たことはあったのですが、実際中身をじっくり読んでもみるということはありませんでした。というのも、『早稲田大学百年史』という大部なものがあるものですから、『百年史』がある以上、その前に編纂されたものはあまり見る必要はないかというような意識を持っていたのです。ところが、今回この講演のために読み直してみましたところ、やはりそれぞれに特徴があつて、必ずしも『百年史』だけ見ればよいというふうには言えない部分があるなということを感じました。

大学の編纂事業といいますと、大学の歴史に関する編纂物と、大学の功労者に関する編纂物と、両方ありうるわけで、戦後においてはこの両者を大学としてやるようになっていますが、戦前においては、前者つまり大学の歴史については、大学としてやっているのですけれども、後者つまり功労者の伝記などについては、一応大学の事業と切り離

してやっていることの方が多いいという特徴があります。特に早稲田大学の場合には、功労者のなかに政治活動に関わっていた人物が多いので、そうした政治的な意味を持ちかねない伝記と、教育機関である大学とを切り離すという意図があったのではないかと思います。戦後になりますと、そうした功労者の事蹟も、あくまで過去の歴史として扱えるようになりますので、大学の事業の一環として行われるようになったのではないかと思います。戦前における大学の功労者に関する編纂物は、結構たくさんあって、実際には編纂作業に学校関係者が中心的に携わっていたりするので、一応大学の公的な事業としては行っていないということ、今回はその多くを省いてお話しすることになると思います。

それで、大学の公的な年史として最初のもは、二〇周年祝典の翌年に作られた『早稲田大学開校東京専門学校創立二十年記念録』（早稲田学会、一九〇三年）というものです。今申しましたように、これは一応最初の公的年史というふうに位置づけられるもので、その後の年史類においてもそのように書かれているんですが、実際に中身を見ると、大学の歴史について叙述した部分はごく一部で、構成としては、最初に二〇周年祝典と早稲田大学開校祝典の様子が描かれ、そのあとで早稲田大学の現況をかなり長く述べて、最後に関係者の回想談と、過去の周年事業における学校の幹部の演説が収録されるという形になっています。ですので、当時の記録としての要素がかなり強いものになっています。二〇周年の年ではなく、翌年に刊行されたのも、祝典の記録を残すためでした。また、学校の幹部の演説や回顧談を多くのページを割いて収録したあたりは、さきほど述べた、大学のアイデンティティがどこにあるのか、ということを確認しようという意図が強くあったことによるのだらうと思います。

それに対して、その四年後に編まれた、早稲田大学編輯部編『二十五年記念早稲田大学創業録』（早稲田大学出版部、一九〇七年）というものがあるのですが、こちらは創設以来の歴史に関する叙述が中心となっていて、記

録的要素を持たない、歴史叙述のみを目的とした初めての学校史だと思っています。統計資料や平面図などもかなりたくさん収録されているわけです。ただ、この本は学校の歴史の叙述に専念しています、当時の時代状況とか学校外のことにはほとんど触れられていません。また、関係者の詳伝などもなくて、学校の沿革史のみに的を絞ったものとなっています。

その六年後には、早稲田大学編輯部編『創立三十年記念早稲田大学創業録』（早稲田大学出版部、一九三三年）という本が編纂されました。名前は二五周年の時とそっくりな題名で、「二十五」が「三十」に変わっただけの様な感じなのですけども、中身は大きく異なっています、むしろ二〇年の時のものに近い内容になっています。先ほど申しましたように、この三〇周年の前の二五周年記念の時に第二期計画として理工科が設置されるわけですけれども、この三〇年の時のこの本はその第二期計画の実施報告のような意味が強いようでした、理工科の準備の段階からそれが実際に動いて五年経つまでの間の記述が、かなり多くを占めています。ですので、創立以来の歴史についてはごく簡単にしか記述されていません。やはり二〇年の時のものと近い記録的な要素が強いものとなっているわけです。

次に創立五〇年の時に出された西村真次『半世紀の早稲田』（早稲田大学出版部、一九三三年）というものがございます。これは短い期間で一氣に執筆・編集されたものなのですが、当時、学内に所蔵されていた原史料を編集材料に使っていました、ここで使われているものの中には、現在、所在不明となっているものも多いのですけれども、そうした一次史料も用いた初めての本格的な早稲田大学史となっています。そしてこの本は、二五周年の時の『早稲田大学創業録』とはかなり対照的な性格を持っています、例えば、この序文のところをちよつと読んでみますと、「時は流転し、人は代謝し、時と人との交錯の上に世相は変遷し、文化は進歩する。我早稲田大学の発生、展開の過程は、狭く見れば只だ一個の私学発達史に過ぎないけれども、広く觀れば我邦の最近文明史を代表し得る重要な史実

であつて、…我早稲田大学の歴史は新日本の文化史中の一部を形造るだけのものではなくて、寧ろ近世文明展開の因子であり、現代社会機構の内的要素であり…」云々と書いてあります（第一章総説第一節序語）。要するに、かつての二五周年の時のものが学校の内部のことだけに触れていたのに対して、これは早稲田大学こそが日本の近代の歴史を動かした因子なのだという視点から、近代史の中にこの学校の果たした役割を位置づけようというような意識で編纂されたものだと、明確に受け取ることができるわけです。

では、西村が言う、この近代史、文明史を動かしたというのは具体的にはどういふことなのかといいますと、「学苑存在の文化史的意義は三則から把握せられる」「第一、我学園は官権乃至権力から独立して、自由に真理の探究に従事し來つた」「第二、自由の学府に於いて自由の教育を受けた卒業者は、社会に出で、其学問を実地に応用し、社会指導者として、文化伝播者として全力を羽搏つた」^{はばた}「第三、かうした卒業者と、かうした学園とは、一個の校友会といふ家族的結合を作り、有力なる文化団体としての存在を示してゐる」と西村は述べています（第一章総説第二節「学苑存在の文化史的意義」）。つまり、学校が権力と厳しく対峙したということとか、卒業生が社会的な指導者としてこの近代日本を作つたというようなことを指しているわけです。第二と第三は個人か団体かというだけで、割と同じようなことを言っているだけのようないふ気もしますけれども、つまりこのような我々意識がものすごく強いわけです。ですから、学校外のかかなり広い視野から見ているということも言えるし、逆にいえば、かなり手前味噌的に早稲田の意義を強調しているところがあるということもできるわけです。

さらにこの西村の著書は、大学の歴史について大きな時期区分を初めて行つたという点でも、注目されます。「第一期 創始期 明治十五年乃至明治三十五年」「第二期 發展期 明治三十五年乃至明治四十年」「第三期 拡充期 明治四十年乃至大正七年」「第四期 昂揚期 大正七年以降」というのが西村の時代区分なわけですが、あとでお話

しします戦後に編まれた年史でも、「創始期」「発展期」「拡充期」「昂揚期」という四期に分けるやり方は踏襲されて使われていますので（ただしそれぞれが指す年代設定は変わっていますが）、その意味でも、年史の歴史の中では大きな意味を持つものであったといえます。

ただ、やはり時代が近い部分については、記述があまり詳しくないところもあります。特に早稲田大学には「早稲田騒動」という、学校を二分する大騒動がありまして、ものすごく単純に言えば、それまで学長であった高田早苗が第二次大隈内閣の文部大臣に就任したため、天野為之に学長の地位を譲ったわけですが、内閣が倒れたあと、高田がまた学長に戻るべきだとか、それはよくないとかいうところで、高田派と天野派とに分かれて騒動がおこったわけです。一応表面上はけんか両成敗という形で、高田側と天野側の両方が引退したのですが、のちに高田が復帰することからわかるように、実質的には騒動の経緯を具体的に見るとかなり複雑で、単純にこの二派だけに分けられないところがあるので、実際には騒動の経緯を具体的に見るとかなり複雑で、単純にこの二派だけに分けられないところがあるので、ですけれども、とにかくこれが大学に非常に長らくしこりを残す大騒動になったわけです。そしてこれが早稲田大学の年史を見る上ではかなり問題になる部分となるわけです。この西村の本は、早稲田騒動から十数年しか経ってない時期のものでして、「いふところの『早稲田騒動』は、高田が入閣したために、其後任に推されて学長となった天野為之の任期が将に尽きやうとする少し前に初まった。今日はまだ事件の展開について詳述する時期に達してゐないから省くが……」というように詳しい記述を避け、その後高田早苗の回顧録『半峰昔ばなし』の記述を長文引用するというのが、事実上、高田側の言い分を掲載する形になっているわけです。

そのような問題はあるのですが、時代状況についての叙述が豊富で、かつ卒業生の就職先についても分析されたり、あるいは海外の各大学との比較がなされていたりと、かなり広い視野で書こうという意図が顕著なわけで、その意味では今でも読むに値する部分はまだ残っているということができます。ただ、今申しましたように、後半、書かれた時代に近い部分になると、長いページをかけて学科配当表の引用がずっと続いているなど、事実や史料の羅列的な部分が増える傾向にあります。ただ、これは単にこの西村の本だけの問題ではなくて、その後の年史も書かれた時代に近くなればなるほど、そういうふうになる傾向があるということは指摘できます。

さて次に、学校史ではありませんが、『大隈侯八十五年史』について触れたいと思います。さきほど、功労者の伝記類は省くということを申しあげたのですが、これだけは創設者の本格的伝記ということで、大学とも極めて深い関係にありますので、触れておきたいと思います。大隈重信は一九二二年に亡くなったわけですが、亡くなる前から実は編纂の準備が始まっています。亡くなったあとにそれが本格化して、大隈が亡くなった四年後の一九二六年に『大隈侯八十五年史』全三巻として出されるわけです。一応、今のところ、これが大隈重信に関する一番詳しい伝記ということになっているわけですが、中身は非常に問題の多いものになっています。それは編纂の経緯に由来する所も多く、まずこの本をどういうふうに作るかということで、内部に対立が起きました。これが年史編纂の抱える問題とかぶるところがありますので、あえてこれだけちょっと触れさせていたきたいのですが、まずこの本の編纂には大学から多額の補助金が出されていて、かつ編纂会の組織案というのも大学の維持員会の決議を経っていました。いわば大学の半ば公的な事業であるとも言えるわけです。しかし、表面上は、あくまで大学と別個の事業という形で行われました。実際に、編纂に際してどういう衝突があったかということについて細かく述べる時間はありませんが、これについては以前論文を書いたことがありますので、詳しく知りたい方はそちらをごらん

なっていただけだと思います（真辺将之『大隈侯八十五年史』編纂過程とその特質、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』五七四、二〇二二年二月）。いま簡単に要点のみ申しますと、一つは、読者をどういうところに据えるかというところで見解の対立がありました。専門家向けの、史料に基づいた本当に詳しいものを書くのか、それとも、むしろ一般国民に向けた読みやすい伝記を書くのかというところで対立がありまして、結局、後者の方が採用されたわけです。費用をあまりかけられず、編纂期間をなるべく短く収めたいという事情がその背景にありました。かつ、大隈をどれだけ讃えるかというところでもいろいろ対立がありまして、「世界的大偉人」というような形で大仰に讃えようという人もいたんですけれども、あんまり露骨なものとはよくないということで、控えめに讃えるというような路線がとられることになったわけです。

こうした路線決定を主導したのは、市島謙吉という人物であつたわけですが、このことが結果的に多くの関係者に不満を残したようで、それは『大隈侯八十五年史』の序文にも現れています。例えば、武富時敏という人物、これは佐賀出身で、ながらく大隈の下で活動していた政党政治家なのですが、この人は「大隈の真面目を描き出すことは、此伝記編纂者の地位からは、到底企て及ぶ所ではない」「侯の真面目を描き出すことは後の史家に持つべきを得ぬ次第だろう」と批判的なことを書いています。序文にその本の中身についての批判を書くということは普通はないと思うのだけれども、あえてこういうことを書いています。かつ、市島の友人である高田早苗ですが、わざわざその武富の批判的な言葉を引いた上で、あくまで本書は一般読者に向けた書であり、侯の真面目を伝えることが目的ではないということを書いているわけです。恐らく、この二人には、この伝記に対する相当な不満があつたのではないかと思われます。そしてこのことが、渡辺幾治郎という研究者の手により、『文書より観たる大隈重信侯』という、史料を基にした、かなり実証的な研究書が、この六年後に早稲田大学出版部から出されることに

つながったのではないかと思います。『八十五年史』に不満だった人たちが、もつと史料に基づいたしつかりしたものをということで動いたのではないかと推察されるわけです。

以上のように、この大隈の伝記編纂では、編纂の目的が顕彰にあるのか、それとも史実を明らかにする検証こそが目的なのかということや、いったい誰のための編纂物なのか、読み手として誰を想定するのか、というようなことが問題となったわけですが、このような問題は、その後の年史編纂の際にも、非常に重要な問題として、編纂者が常に直面する問題になるわけです。

さて、大学の年史に話を戻しますと、次に出したものは戦後のものになります。「七十周年記念事業委員会」において企画された『早稲田大学七十年誌』（早稲田大学発行、一九五二年）というものであります。これは、『七十年誌』の「誌」が歴史の「史」ではなくて、雑誌の「誌」というふうになっているわけですが、ここには意味がありまして、実はこの本は、頁の上半分が全部写真になっているのです。で、下半分が文章という形になっています。つまり写真誌としての意味を持っているわけです。図録的な要素と年史的な要素をミックスしているので、この雑誌の「誌」という字を使ったのだと思われます。

この本は河竹繁俊、佐々木八郎、稲垣達郎、山路平四郎、細井栄吉、陣内宜男、洞富雄の各氏により内容の立案がされたのち、本文の執筆は国文学者の稲垣達郎氏が担当したそうです。ほかにも編纂担当者としては稲垣氏のほか、山路平四郎、鶴月洋、高橋春雄の各氏も名を連ねています。当時の島田孝一総長によるはしがきをちよつと読みますと、「いまここに、記念祝賀の式典を挙げるに際して、ささやかな七十年記念誌を編みましたのは、将来のため一つの道標にしたかったからであります。また、稽古照今という言葉があります。こういう機会にこそ、わたくしどもはお互いに、光栄あるわが大学の伝統を、あらためて回顧し認識し、学問の独立と活用、模範国民の造就という、本大

学の教旨、使命にのっとり、わが国文化の向上に寄与するため、層一層の飛躍発展を銘記したかったからであります」とあります。大学の教旨、あるいは使命というものの、アイデンティティがどこにあるかということを明らかにするために、この本を編んだのだということが序文で総長によって述べられているわけです。

あとがきには、「敗戦という未曾有の転換期をはさむ七十年の長年月なので、史料の膨大なのに悩む一方、また、散佚史料の多いのにも苦しんだ」とありますが、グラフ誌的な要素を併せ持っていることもあって、中身としては、あまり新しい事実が明らかにされている部分はありません。時期区分についても、何年から何年までを拡充期とするかというような年代設定は多少変わっているにしても、四期の分類そのものは西村真次の『半世紀の早稲田』から継承しています。基礎的な事実を手際よく叙述してはいますが、特に目新しい史料を使って、新しい事実を明らかにしたところはないのです。ただ、歴史の叙述に入る前の一番冒頭の部分に「建学の精神」という一章を設けていまして、ここに「早稲田大学教旨」について詳しく解説を加えているなど、歴史を明らかにすることそれ自体よりも、大学としての精神、あるいはアイデンティティがどこにあるのかを確認しようという点を重視しているということができると思います。

この『七十年誌』は、西村真次の『早稲田の半世紀』からさらに二〇年が経過した時点のものです。早稲田騒動については、やはり詳しくは述べられていません。「大正六年（一九一七）春、天野学長の任期が尽きようとするころ、早稲田の森に暗雲低迷のきざしが見えた。…次期学長の問題とからみ合せて、早稲田の地殻をゆりうごかし、思わぬ激動となって展開した。総長大隈をはじめ、およそ早稲田学園につながる者で、この時、心を痛めなかつた者の存在を考えることは、まったく不可能であるにちがいない」と述べて、騒動の具体的内容についてはほとんど触れず、関係者の奔走で天野が学園を去ったことのみが述べられています。やはりこの時点でも、早稲田騒動に触れることがタ

ブーであったことがわかります。

このうち、七五周年記念事業の際には、早稲田大学社会科学研究所編『大隈文書』全五巻（早稲田大学社会科学研究所、一九五八―一九六二年）という史料集が出ています。これは図書館の大隈文書の書類の部の一部を翻刻した史料集ですが、大学全体の事業というよりは、社会科学研究所という一部局の事業と言う性格が強いに思います。

続いて八〇周年の際には中西敬二郎『早稲田大学八十年誌』（早稲田大学、一九六二年）が出ています。定金右源二先生の監修で、著者名は中西敬二郎氏になっていますが、本の中身を見ると、中西氏のほかに、川村喜一氏、鹿野政直先生も編集員として名を連ねています。なお、この時は、この『八十年誌』のほかに、京口元吉『高田早苗伝』（早稲田大学出版部、一九六二年）、柳田泉『明治文明史における大隈重信』（早稲田大学出版部、一九六二年）も出ております。『高田早苗伝』の方は、京口先生著となっていますが、内容のかなりの部分を鹿野政直先生が準備されて、最後に京口先生が目を通して手を入れるという形であったと、私は以前うかがったことがあります。それはともかく、大学功労者の二人の伝記と、大学史との三冊がセットになっている点、この時の編集事業の特徴でもありました。

それで『八十年誌』の中身をみてみたいのですが、七〇周年の際に既に年史を出していて、それから一〇年しか経っていないのに、新しいものを出すということで、やはり一〇年前とは違うものを出したいという意識が編集に携わった方々の心中にあったようで、名前は一〇年前のものと同じですが、内容的にはかなり特徴のある、七〇年のものとはだいぶ性格の違うものになっています。

大浜信泉総長（当時）による序文を見ますと、「大学の歴史の叙述の仕方には、年代記風の書き方もあるが、ただ年代を追って目ぼしい事項を羅列したのでは、たとえその大学の記録としては貴くとも、一般の読み物としては興味に乏しく教えられるところがすくない。そこで本書の著者は、この方法をさげ、早稲田大学八十年の歩みの中から、

その時代時代の代表的事象をとらえ、それを中心として、その背景をなす政治、経済、社会、さらに人間関係等との関連を辿り、一般の歴史の流れの中において大学の発展の過程を浮き彫りにする方法がとられた。従ってこの書は、一大学の記録にとどまらず、ある意味においては日本の近代史の一環をなすものということができよう」と書いてあります。

要するに、これは何かというと、読み物として興味深いものでなければならぬということを書っているわけです。恐らく、『七十年誌』の記述が大学のアイデンティティを冒頭に持つてきて、あとは事実について、年代記風に叙述していくというふうなもので、無味乾燥に見えたということがあるのではないかと推察されます。「あとがき」を見ると、面白い読み物としての校史という依頼を大学当局から受けたと、執筆を担当した中西敬二郎氏が書いています。そして中西氏は、「既にいくつかの校史が出ているが、それをもとにしたのでは」一貫した史観は成り立たない。浅学の徒といえども多少の史観をもっているからには、たとえ記述がまずくとも、初めから自分の筆で書いていかなければならない」というふうにも書いています。

つまり、自分の史観で、個性的に書いたと述べているわけですが、中身をみても、非常に個性の強く出た叙述になっています。西村真次以降、大学史を四期に区分するというのが一般的に行われてきたわけですが、この本はそうした時代区分を一切せずに、二二章構成という形をとっています。そして第一章の冒頭の記述をみてくださいと、「先ず、極東の地図を広げてみよう。／アジア大陸の東端、そこには三つの可愛い花づなが、北から南にかけ、緩やかな弧を描きながら連なっている。かつては日本の領土であったこの列島も、昭和二十年八月、……」(／は改行を示す)というふうな書き出しです。同じく第二章の冒頭も「その頃、小野梓は橋場に住んでいた。／橋場というのは、今の白髭橋近くの地名で、『江戸往古図説』や『望海毎談』によると、もと砂尾郷石浜庄橋場村と言い、北条氏の所領であった。

江戸の北辺に位したから、定めし静寂なところのように思われるが……」という書き出しになっています。非常に個性的な筆致で、かつ大学の歴史と直接関係のないようなことも含めて書き出しているという特徴があるわけです。そして狭い意味での学校史ではなく、広い視座からの叙述を心掛けるとともに、読み物としての面白さを強く意識しています。各章の冒頭には時代状況についての叙述が多く書き込まれていまして「凡そ個人や団体の歴史でも、それ自身が単独で起こり、消長することはありえない。つまりその背景をなす時代と不即不離の関係をもつから、これを鮮明にしないと、真の意味での校史は語り得ない。そこで記述にあたっては、概観、概略でもいいから、是非これを書かねばならないというのが、我が主張であり、態度であった。ただ初めの構想よりもややくわしくなったのは、本書が学生諸君にも配布する計画があると聞き、何かの参考になるかもしれないと考えたからである。」（執筆者あとがき）と中西氏が書いている通り、かなり広い視野から描くとともに、読み物としての面白さを強く意識して書かれているわけです。一番最後の第二章などは、様々な時代の卒業生の回顧録を切り貼りして対談風に並べた「いまはむかし早稲田書生気質」というとても面白い文章になっていて、最後まで読み物として興味深いものになってしまうという意図が貫徹されています。

次に、先ほどから大学史のタブーとして着目している早稲田騒動の記述ですが、この本は、それまでの本に比べると、若干ですが概要について具体的に触れていることが目に付きます。特にそれまで使われていなかった史料、市島謙吉の手記である『校紛録』や、大学が作製した経緯説明のパンフレット『学長問題経緯概要』、教員であった松平康正・牧野謙次郎の手記である『学長問題調停交渉始末』などを典拠に使用していることが着目されます。とはいえ、これらの史料は高田派の立場から書かれた史料であって、それを元にした本文の記述も、天野為之の「頑固一徹な学者気質が然らしめたものと考えざるを得ない」として事件の責任を天野に帰すなど、天野に対して批判的であり、や

はり高田派の立場を代弁しているという側面は否定できません。

ただ、のちに『早稲田大学百年史』の時に使われる『早大紛擾秘史』という大学側が編纂した全八冊の詳細な史料があるのですが、それは当時まだ見つかっていなかったようで、この本の中では使われていません。ですので、それまでにない史料を使っているのですが、記述はのちの『百年史』に比べればごくごく簡単なものであって、かつ勝利した当局側の高田派の意図を代弁する形になっているということが指摘できるわけです。

この『八十年誌』の次に出されたのが早稲田大学史編集所編『早稲田大学百年史』全八巻（早稲田大学、一九八二～一九九七年）になるわけですが、それまでの年史は、周年のその年か、あるいはその次の年に出されているのですけれども、この『百年史』はそれまでのものと違って、非常に長い年月をかけて編集されたわけです。結果的には全八巻構成となりますが、創立一〇〇周年の一九八二年の時点では二巻までしか出ておらず、一五年後の一九九七年七月によくやく完結するという、非常に長い時間がかかった年史であったわけです。この『百年史』にどういう特徴があつて、どういう問題点があるかということは、このあと別に項目を立てましたので、そちらで述べさせていただきます。

他にその後出ているものとして、同じく一〇〇周年事業の一環と位置付けられた早稲田大学史編集所編『小野梓全集』（早稲田大学出版部、一九七八～一九八二年）というものがあります。さらにこの全集をもとに研究論文集である早稲田大学史編集所編『小野梓の研究』（早稲田大学出版部、一九八六年）というものが出されていますが、こちらの論集は「小野梓没後百年記念」という位置づけになっています。

さらに、最初にちよつとお話ししました早稲田大学史資料センター編『高田早苗の総合的研究』（二〇〇二年、早稲田大学史資料センター）が出ています。一応、これは一二五周年記念事業の一環という位置づけになっており

ますが、この位置づけは出版に際して後付けでつけたものでして、スタート時点ではこうした位置づけではありませんでした。『百年史』の編纂が終わったこともあって、その編纂を担当していた早稲田大学大学史編集所が、一九九八年に大学史資料センターに改組されました。そして改組された資料センターの中に研究部門として、早稲田大学の学術研究史についての研究部会と、自由民権運動についての研究部会、さらに高田早苗研究部会の三つの部会が設置されました。それで当初は、この三つそれぞれ論文集を出すということを目標として、高田に関しては併せて著作集も出すと計画していたわけです。

ところが、最初に部会を設置した際に、予算の措置まで見通しを立てて始めたものではなかったために、最後の段階になって、結局、刊行ができないという結果になりました。『高田早苗の総合的研究』だけは、なんとか予算を付けてもらい、一二五周年記念事業の一環と銘打って刊行できたのですが、学術史の部会の方は、研究調査員の先生方に提出してもらった論文をPDF化して、それを集めたCD-ROMを出すという形になりました。そして自由民権研究部会の方は、成果となる論文集を出すことができませんでした。この予算的問題による挫折というのは、特にこの頃から顕著な問題となってきました。大学の側がこういう年史編纂などにシビアな態度をとるようになってきて、それは『百年史』の編纂が当初の予定よりあまりに遅れてしまってお金がかかり過ぎたということや、バブル崩壊後の日本経済の状況、さらに大学財政の立て直しといったいろんな要素がかかわっているわけですが、この予算という問題は、これから編纂される『百五十年史』においてもかなり問題となってくる部分ではないかと思っています。

さらに、そのあと、早稲田大学大学史資料センター編『大隈重信関係文書』全一一卷（二〇〇四～二〇一五年）を、みずす書房という出版社から出しましたが、これも創立一二五周年記念事業の一環として予算措置が行われています。これについては、当初の予定から遅れることなく一年に一冊ずつ刊行し続けて、昨年度ついに全巻を刊行し終え

ることができたということは最初にお話しいたしました通りです。

三 『早稲田大学百年史』の特徴・問題点

以上がこれまでの年史編纂の概要なのですが、さきほど述べましたように、今年度から『早稲田大学百五十年史』の編纂事業が本格的に始まるわけです。新しい年史編纂にあたって、一番大事なことは、その前に編まれた『百年史』にどのような特徴があつて、どのような問題点があるかを検討する作業であろうと思います。これについては、実際の記述に則した検討が今後、編纂作業のなかで具体的に行われていくことになると思うのですが、実は、『百五十年史』編纂を行う準備段階の作業をずっと私がセンターにいるときからやっております、その時に、『百年史』の編纂に携わった方々に、編纂事業についての反省点や問題点などの聞き取りなどをしたという経緯がございます。以上はその聞き取りの内容をふまえてお話しさせていただくものです。もちろん、私は直接『百年史』の編纂には一切携わっていませんので、以下にお話しすることは、私が実際に見たことではありません。ですので、誤りがないとも保証できないのですが、あくまでそういう情報であることを留意の上で、聞いていただきたいと思います。

まずこの『百年史』の特徴、特に他の大学の年史などと比較しての特徴として、「資料編」が無いということが挙げられると思います。通常の大学の年史とか、あるいは自治体史などもそうだと思いますが、資料編を先に作って、それから年史の記述の部分を集めるというのが理想的なあり方ではないかと思えます。しかし、早稲田の『百年史』の場合は資料編が一切無く、重要な史料については本文の中に引用として組み込むという形で叙述がされているわけです。これはどうも、最初の編纂方針が、一般向けの読み物として面白い物にしようという方針だったことに基づく

ようなのです。ところが、途中でそうした方針が変わったようで、そのことが本文に長大な史料を引用するという形式になったことにより大きく影響しているのではないかと思います。

その一方で、『稿本早稲田大学百年史』というものを、『百年史』を出す一段階前に刊行しています。つまり、稿本として一回出して、それにさらに修正変更を加えて正式の『百年史』にしていくという、二段階の形で出されたという特徴があるわけです。この『稿本』の最初の巻には、「専門的学術書というよりは、読者の対象を一般卒業生や学生におく」と明記されています、この『稿本』の最初の巻を出した段階では、まだ読み物的なものを目指していたということが分かるわけです。

また、これも聞いた話ではないのですが、高野善一さんという、『百年史』編纂以前から大学史編集所の前身である校史資料室に勤めてらっしゃった方と、『百年史』の執筆グループの中心的存在だった木村毅先生との間に、編纂方針を巡って対立があつて、この『稿本』第一巻の編集の段階で高野さんの意見が退けられたことによって、高野さんが退職に追い込まれるというようなことがあつたとうかがっています。お二方とも既に亡くなられておりまして、この経緯はどこかに活字にもなっていて、かつて何かで読んだことがありますから、公に出してもかまわないことだと思います。

木村毅先生は、ご存じの通り著作が山のようにある有名な文筆家でいらっしゃいましたので、非常に個性的な筆致で原稿を書かれています。『百年史』の第一巻を見ますと、かなり個性的、悪く言えば主観が入り込んだ記述が多いわけです。ところが、第二巻以降、あとの方になればなるほど客観的な事実の記述が中心となってきます。最初の方が読み物としては面白いのですけども、信頼度としてはどうかという点があり、逆に、後ろの方に行くと、信頼度はあるけれども、ちょっと読むのが退屈だったという要素が『百年史』にはあるわけです。

さらに、この『百年史』の執筆スタッフには、教育史とか教育学を専門とする人がおらず、歴史研究者が中心であったということが指摘できます。ですの、近代史、特に政治史・思想史・文化史の中に早稲田大学史を位置づけようという意識はものすごく強くて、特に最初の方の巻では、そうした記述が多く、そのことは執筆者の個性が強く出るということにもつながっています。その反面、教育史的な視点がかなり薄いのではないかとという点が指摘できます。他の大学との比較の視点というようなものも、あまり見られません。

それと、さきほど述べましたが、編纂が予定より非常に延びたという問題点がありました。その結果、大学が編纂事業を迷惑に思うようなことにもつながったのではないかと思います。実際、私が大学史の助手になってから、大学の幹部であった方に、『百年史』の編纂事業について、そういうようなことを実際に言われたことがあります。特に、第三卷までの編集にかなり時間をかけすぎってしまったとのことで、第四卷第五卷など、後の方になるにつれて時間をかけられず手薄になってしまったというふうに、編集を担当していた方からもうかがいました。ただ、後ろのほうの手薄になったのは、単に編纂が延びたからというだけではなく、時代が現代に近くなって、歴史として客観的に評価できない、どうしても表面的な記述しかできないということも関係していたとは思います。

そのことと関連して、先ほどから問題になっている早稲田騒動の記述ですが、この早稲田騒動について、初めて本格的に触れたのが、この『百年史』ということになるわけです。『百年史』より前の年史は、記述を避ける一方で、基本的にはどの年史も全て高田派の立場に立って書いていたことはさきほど述べましたが、でもそれは実は社会の一般的な見方ではありませんでした。実際には、世間一般的に、早稲田騒動は天野派の方が正しくて、高田派の陰謀と申しますか、高田派による大学の私物化の結果として天野は追い出されたのだというような見方が強かったわけです。たとえば、当時学生として在籍していてこの騒動にかかわった尾崎士郎の小説などにもそういう見方が書かれて

いまして、早稲田出身者の多かった新聞や雑誌などにもそういう意見が書かれましたから、執筆にあたった木村毅先生ご自身も、この『百年史』の編纂に携わるまではそういう考えだったというふうに述べています。

ところが、『早大紛擾秘史』という全八冊の史料がこの編纂作業の中で新しく発見されまして、その史料を木村先生が読んだところ、事実は自分が読んだり聞いたりしていたことと全く逆であって、非常に驚いたというわけです。それで、この史料によって、自分の早稲田騒動に対する見方は一八〇度転換したので、それを明らかにするのだ、従来タブーとされてきて、大学では腫れ物に触るようにして触れてこなかったのだけでも、この『百年史』ではタブーなく詳細に記述して、世の中の誤解を解くのだというような立場で、詳しく書いたわけです。

ですので、確かにそれまでほとんど触れていなかったこの早稲田騒動に、多くのページ数をかけて詳細に記述しているという点では、『百年史』は早稲田騒動の研究史に新たなものを付け加えたということができます。しかしその一方で、その記述のもとになった『早大紛擾秘史』という史料がどういう史料かというと、騒動の直後に大学側が編纂した史料でありまして、基本的に勝利した高田派の側の立場で書かれていることは間違いないわけです。そうした、一方の側が編纂した立場に立つ史料を基に書いているので、やはりそれまで同様に、高田派の側の見方を代弁しているという側面があるのではないかとということで、その意味では実は従来の年史編纂の記述の枠を超えてはいないし、必ずしも客観的な記述とも言い難いのではないかという問題点があるわけです。

また、戦争中のことについてかなり詳しく叙述していて、戦没者の名簿もわかる限りすべて掲載するなど、可能な限り事実を明らかにしようという意図が感じられます。この機会に、終戦までのことについてはタブーなしでやっついこうという意識が編纂担当者のなかにあり、力を入れたのだということをおっしゃっている方が、私が聞き取りしたなかにおられました。もちろん、最近各大学で戦時中の大学の戦争協力の問題などを精力的に明らかにされている

ところもありまして、そうしたものと比べてみれば、いろいろと問題点や足りないところもあるとは思いますが、それでも従来の年史での早稲田騒動の書き方のように、腫れ物に触るような書き方ではないわけです。

しかし、戦後の記述はやはりタブー無しというわけにはいかなかったと、同じ方がおっしゃっていました。特に学生運動です。学費・学館紛争という大紛争が早稲田大学にはあるわけですが、特にこれ以降についての記述は非常に手薄にせざるをえなかったようです。同時代の事件ですから、まだ関係者のなかに社会で活躍している人がたくさんいますので、個人情報やプライバシー、名誉棄損などの問題も考慮して、あまり詳しく触れないという形になっているわけです。ですから『百五十年史』ではこの部分をどう書くかということとは新しい問題として出て来ることになると思います。ただ危惧されることは、大学の歴史を書くというと、どうしても大学側の記録が中心史料になってしまうがちなわけですが、そうした大学側の記録をもとに記述を詳しく書くということになると、『百年史』における早稲田騒動の記述と同じような問題を孕むことになってしまうわけです。つまり大学当局の考えを代弁する記述になってしまうということです。そのあたりの問題をどうクリアしていくのかということは、『百五十年史』において課題となってくる部分ですし、あるいはかかわった学生への聞き取りや、史料集めなどを、まだ生きている人が沢山いる今の段階から始めておかなくてはならないと思います。学生運動の他には商学部の入試不正事件や成績原簿改竄事件、一〇〇周年記念事業に際して幕張と所沢のどちらに新学部を設置するかということで学内が二つに割れた事件なども、戦後の早稲田大学史のある種のタブーとして存在しています。これらについても、なるべく偏りなく幅広く史料を集めて記述する必要があるように思います。

それから、『百年史』には別巻として部局史が二冊刊行されているのですが、この別巻は実は『百年史』の編纂を行っていた大学史編集所で書かずに、各学部など当該の部局に執筆を任せるという形式を取ったそうなのです。さき

ほど編集作業が遅れたと申しましたが、部局史以外の本巻の部分だけで作業が手一杯で、そこまで手が回らなかったという事情があるようなのですけれども、その結果、記述の形式や内容がばらばらになっていて、かつ、誤りも非常に多くなってしまったようです。大学史編集所ではいちおう校正担当者が目を通すぐらいのことはしたらしいですが、記述全体の正誤をチェックして手直しするところまではできず、結局あまりに誤りが多いので、総索引にはこの別巻の内容は含めないこととしてしまったのです。ですからいま刊行されているものを見ますと、索引で別巻は出てこないのです。

部局史というのは、非常に細かな変更というものが多い部分で、追いかけるのはとても難しい部分です。特に時間を経てしまおうと追いかけるのが難しくなっています。一例を挙げれば、ある学科が廃止になり、新しい学科が出来るとします。新しい学科の出来た年を知るのは割と簡単なんです、では古い学科が廃止されたのはいつかということ調べると、これがなかなかわかりません。というのも、新しい学科が出来たから旧学科は廃止、ということではなくて、そこに在籍している学生がいなくなった時点でその学科が廃止になるからです。私の所属する文学部術院でも、かつての第一・第二文学部を文学部と文化構想学部に改組したわけですが、今でも第一・第二文学部の一部の専修はまだ存在しているのです。しかし、どの専修がいつ廃止されたかというところになりますと、専修ごとに廃止年月が違いますから、いちいち調べるとものすごく大変なのです。特に各部局の記録を見ないとそういうことはなかなか出ていないわけです。本部の記録は資料センターに移管されたりすることもあるのですが、学部などの部局の記録はなかなか資料センターには入ってこないわけで、そこをどういう形で記録を残していくかというのは、『百五十年史』においても、今後問題になってくる部分ではないかと思われれます。

それから、『百年史』についてももうひとつ言えることは、海外の史料をほとんど使っていないということがあります。

す。特に留学生の史料などは、海外に沢山あるわけですが、そういうものはほとんど使われていません。私も少し前に中国の南京にある第二歴史檔案館に行く機会があったのですが、そこにも日中戦争から第二次大戦までの時期に日本にいた中国人留学生の史料がいろいろありました。特に面白いのは、終戦後帰国した際に、国民党から一種の査問のようなものを受けた際の史料がありまして、履歴書や課題図書、読書感想文やら、あるいは日本在留中に何を見聞したかというような作文などがありました。あまり時間がなかったのでしたら読みませんでしたけれども、例えば文学部に留学していた女子学生が、日本の知識人は必ずしも戦争に賛成とは思っていなかったけれども、庶民階級は戦争に熱狂していたというような見聞記を書いていたりしました。この知識人というのは、その学生が接した早稲田の教員たちを指しているのだろうと推察されるわけで、そういう意味で大学史の貴重な史料になるものではないかと思います。もちろん、昔は今ほど史料の公開状況は良くなかったですし、所在を知るツールなどもなかったでしょうから、『百年史』で使えなかったのはやむを得ない部分もあると思うのですが、今後はそういうものを使っていくことが求められるのではないかと思います。特にアジアからの留学生に関する史料は、今探せばかなり見つかるものがあるように思います。

四 『百五十年史』編纂の課題

それでは、以上のようなことを踏まえて、これから編纂される『百五十年史』では、どのような課題が存在しているかということ、最後に述べたいと思います。その前に、今年度から始まる『百五十年史』の構成案についてお話ししますと、今のところ三巻構成というように考えております。ですから、『百年史』に比べると、かなり分量

が少ないということになります。その三巻の内容ですが、第一巻は戦前を扱います。ですから、すでに『百年史』で書かれている部分を圧縮するとともに、『百年史』でまだ明らかにっていないなかったことで、その後の研究で明らかになった部分などもありますし、新しい史料もありますので、そのあたりを加えていくことになると思います。そして次の第二巻と第三巻が、戦後の新制大学期の巻になるわけですが、今のところ大学設置基準大綱化のあたりで第二巻と第三巻を区切るという案になっています。ただ、これは今後変わっていく可能性もあり、まだ未確定な要素があります。

ですので、第一巻は『百年史』の圧縮プラスアルファ、第二巻については、一応『百年史』に記述はあるのですが、さきほど申しましたようにかなり手薄な部分ですので、それなりの編集作業が必要になってくる部分だと思えます。そして第三巻は、『百年史』では扱われていない全く手つかずの部分ですし、かつ今の時代の話も記述に含まれるわけで、同時進行で今の状況を追っていくつつ、ゼロから新しく編集作業を行っていくなくてはなりません。またこの全三巻とは別に、学生向けの冊子ですとか、写真集のようなものも別に出すという計画もありますが、まだ今は計画段階ですので、実際どうなるかはまだ分からない状況です。

それから、さきほど述べましたように、前回の『百年史』には資料編がなかったわけですが、今回の『百五十年史』でも資料編の刊行は三巻の刊行計画には入っていません。しかし、毎年大学史資料センターで出している『早稲田大学史記要』という雑誌があります。普通は「紀要」と書くわけですが、『早稲田大学史記要』は、「記要」と書いています。これはこの雑誌の創刊時に、木村毅先生が、この雑誌には大学史の「要を記す」のだ、というご意見で、こだわりをもってそうされたと聞いています。で、その『早稲田大学史記要』に、編集作業の途上でいろいろと史料を掲載していくということを計画しているようです。それから、ウェブ上でも史料の公開を行っていく計画があります。

ただウェブで公開できる史料といっても限界がありますし、特に最近のものは著作権そのほかの事情で公開できない史料も多くあるでしょうから、そのあたりどうするのかということは難しい問題も出て来るだろうと思います。また範囲についてどこまで限定するか、手を広げてあれもこれもとすればいいというわけでもありませんし、使い勝手の問題や、人員の問題もあるので、そのあたりもいろいろと難しい問題はあるだろうと思います。

以上が『百五十年史』の現段階での構想なのですが、この編纂を始めるにあたっての最大の問題点は、編纂体制の問題だろうと思います。『百年史』の場合、総長直属の組織として編纂がスタートしました。スタート時点での編纂体制のトップは、理事を務め、大浜信泉総長ときわめて親しい間柄であった政経学部教授の小松芳喬先生であり、その下に編纂実務に当たる木村毅先生と中西敬二郎さんなどがおられるという形だったそうです。総長は小松先生にすべてを一任しており、ほとんど総長や当局からの横やりもなく、自由に構想を立てて編纂をスタートすることができたようなのです。その意味で、非常に恵まれた形で編纂をスタートできたわけです。

ところが、『百五十年史』の場合、編纂の中心組織となるであろう大学史資料センターには、任期付きのスタッフしかおりません。そして、聞くところによりますと、編纂事業の予算もあまりたくさんは期待できないのではないかとこの危惧があります。しかしながら、恵まれた体制でスタートした『百年史』ですら、作業には相当な時間がかかって遅れてしまったわけですから、現在のこの限られた人員体制で、本当にスケジュール通りにできるのかどうかという部分に大きな不安があります。特に任期付きということですと、短い期間で人員が入れ替わっていくわけで、年史編纂に向けて継続的に事業に関わることができないわけです。それでは、センターのスタッフでは書けないから、各学部所属の専任教員に書いてもらうのかといえば、それは現在の専任教員の多忙な状況から考えると、これまたかなり難しいですし、編集作業の遅延が相当強く危惧されることになると思います。

しかしなぜスタッフを充実できないかといえば、これもつまるところ予算措置がつかないというところに起因するところが大いわけですが、ではなぜ年史編纂にお金を付けられないのか、ということ自体がひとつの重要な問題であるように思います。このことについては先ほども若干触れましたけれども、『百年史』の編纂が行われていたのは、高度成長の終り頃からバブルの時期にかけてですので、日本経済の状況が今とは違うということはひとつあるわけです。けれども原因はそれだけかといえば、より大きな問題として、歴史、あるいは人文系の学問というものがかなり軽視される時代状況になっていることが背景にあるように思います。

今回の話のなかでも述べましたように、そもそも、周年事業のなかで年史編纂がなぜ重視されたかといえば、大学のアイデンティティの確立ですとか、あるいは広報としての役割に大きな意義が認められたからです。しかし、アイデンティティの確立とか、あるいは広報ということになりますと、どうしても早稲田は素晴らしい、こんな良いところがあるというようなことを言わなくてはならないわけですが、しかしその一方で、歴史学が発達し、かつ大学の創立が同時代史ではなく、客観的に振り返るべき過去の歴史となってきた、学問的にその歴史が検証されるようになってくると、必ずしも大学の理念が素晴らしいのだのと諸手をあげて褒めるとか、そういうことを書くことは控える必要はないけなくなってくるわけです。それどころか、場合によっては、自己にとつての負の歴史についても触れなくてはならなくなります。戦前、戦中はもちろん、戦後にもいろいろと、早稲田大学が社会的に問題になった事件はあるわけですが、こうしたことを掘り起こすことで、大学にとつては不名誉な部分を拡散することにつながる可能性すらあるわけです。とすると、必ずしも大学の宣伝になるわけでも、大学のアイデンティティばかりを手放して叙述できないところも出て来るのです。こうなると、何のために年史編纂を大学のお金でやる必要があるのかということの説明は、なかなか難しい部分があると思います。

もちろん、私は年史編纂が大学にとって必要不可欠な事業であるという立場でありますけれども、それを説明するにはかなり長い理屈が必要になって、どうも単純明快なことが好まれる昨今では、そういう長い説明をしても聞いてくれないということが多いわけです。例えば大学の歴史は、一種の自己点検であるわけですし、かつ、特に私立大学というものは、誰かに頼まれて創られたものではなくて、創設者が自主的に創って育ててきた学校であるわけで、何らかの理念が無いなら、存在する必要もないということすらできるわけです。ただ、そうした必要性の説明には、具体性がありません。具体的に大学にとってどういう効用があるのか、というのは単純に一言では言えませんが、書いてみたり読んでみたりしないとわからない部分もありますから、なかなかそれを理解してもらうことは難しいわけです。それなら、もっとすぐに直接的に大学の役に立つ部分にお金を使おうということになってしまいうわけです。

かつ、そもそも年史というものが誰のためのものなのか、ということも問題です。たとえば、『百年史』を見てみなさい、かなり長い時間と多大な金をかけたけれども、ほとんど読んでいない人はいないじゃないか、と言われたらなんと答えればいいのか。要するに、超大作映画だけれども、それを放映している映画館では閑古鳥が鳴いている、それじゃお金を投資する意味はない、という批判があるわけです。これも非常に難しい問題で、じゃあ、広く読まれる、多くの読者を獲得することだけが大事なのかというと、それは質の問題にかかわってくるわけです。多く読まれるものが必ずしも質が高いわけではありませんし、むしろ逆のことの方が多いわけです。それが大きな問題を孕んでいるわけです。

要するに、多くの人が読むということは、面白く、そして手軽なものということになってしまいうわけですけども、大学史が必要なのは、必ずしもそうしただけで読む、たくさん読んでもらうためというだけではなくて、記録を残しておく、あるいは整理しておくということに大事な意味があるわけです。いつ必要になるかわからないけれども、いざ

必要になったときには引き出すことができる、そういうものを用意していくことにも充分意味があるわけで、特に、そもそも『百五十年史』を編纂すべきだという意見が出てきたのも、『二百年史』を編纂するまで放置していたら、創立一〇〇年から一五〇年ぐらいまでのことはわからないことが多くなってしまうのではないか、だから一五〇年つてのはちょっと半端な周年ではあるわけですけども、半世紀分の記録を残しておく必要がある、ということに起因しているわけです。

ところが、そうしたある意味、ものすごく迂遠な、直接役立つわけではないような意義、いつか必要になった時に引き出せる材料を用意するのだ、ということをして大学側に説明したときに、それで予算が獲得できるかというと、かなり難しいのです。むしろすぐに直接役立つようなことにお金を使ったほうがいいのではないかと、あるいは、特に最近では学費が高くなってきたので、そんな高い学費を取っていながら、学生に還元できるようなものでない年史などにお金を使っているのかという批判は当然ありうるわけで、そこをどう説明していくかということを、読者としてどういうところを想定するのかということと併せて考えていかなければならないだろうということがあります。

それから、誰のための、ということとかわかる問題として、記述スタンスの問題も存在します。つまり、「大学史は『杜史』たるべきか否か」ということです。これは、実際に『百年史』の執筆に携わられた方から、『百年史』が一種の「杜史」のようなものになってしまっているじゃないかという反省の声がありました。大学の内部のことしか書かれていなくて、他の大学との比較とか、教育史全体の中での比較のようなものもない、という意味で、そういう反省をおっしゃられたわけです。

しかし他方で、それとは別に、むしろ早稲田大学の大学史である以上、あくまでも「杜史」に徹するべきじゃないかという声もあるわけです。全体像を描くような教育史は教育史家に任せればいいのであって、やはり早稲田大学と

してやるのであれば、早稲田大学の中に徹して、その変遷を詳細に書く必要があるのではないかと、そういう意見も、『百五十年史』の準備段階では出ました。特にそういう意見の方は、「社史」の枠を超えようとすれば、かなり早稲田中心の教育史、あるいは早稲田中心の日本史というような描き方になって、手前味噌なものになってしまうのではないかと、という危惧を抱いていらっしやるわけです。実際さきほどみたような、一部の戦前の年史にはそういう傾向があることは否めません。

この問題とかかわって、政府の文教政策についてどこまで踏み込むかという問題も存在します。というのも、学校の創設期は、法律の認可の枠内であるとはいえ、誰かに命令されて創ったわけでもなく、創設者がかなり主体的にやっていて、場合によっては政府と厳しく対峙している側面すらあるわけで、ある種政府の教育政策とか東京大学に対するオルタナティブの意味が強いわけですが、近年の大学の在り方というのは、かなり政府の文教政策に左右されるようになってきています。その意味で、政府の政策について触れることは、特に今に近い時代になればなるほど必須になってくるわけですが、しかし、そちらにあまり重点を置きすぎると、単に文政行政史の一事例にすぎなくなってしまうわけです。早稲田大学はあくまで一事例ではないか、早稲田大学を他の大学に置き換えても同じような歴史になるのではないか、それなら、早稲田の大学史としての積極的な意義というのはどこにあるのか、という疑問も出てきかねないわけです。「歴史がこういう状況で、その中で早稲田がこうでした」というだけであるならば、ただ単に歴史の中の一事例というか、必ずしもあまり意義のある位置づけ方にはならないわけですし、逆に、早稲田大学の歴史を通して見ることで初めて見えてくる近代史の一側面みたいなものを明らかにできれば一番意義があるわけですが、実際、そういうことは、言うのは簡単でも、それを具体的に書こうとすれば難しいわけですから、とりわけ、後の方の時代になればなるほど、難しくなってくる部分があると思います。その部分を、どうやって記

述するかというのは、かなり難しい課題だろうと思うわけです。

どこまで視野を広げるのかということでは、さきほど述べた学生運動などもひとつの問題になると思います。早稲田騒動の記述を追ってきました際に述べたことですが、世間の側は圧倒的に天野派寄りの見方が多かったわけですが、早稲田で編纂した年史においては、常に大学側つまり高田派の立場を代弁する記述がされているということがあるわけです。早稲田騒動については今は完全に過去の歴史になっていますので、『百五十年史』ではかなり客観的に書くことも可能でしょうが、『百五十年史』では戦後の学生運動というのが問題になってくるわけです。これをもし大学側の記録だけで書くことになれば、大学当局の意見を代弁する結果に終わるのではないかとすることもさきほど述べました。ただ、他方で、学生の側の言い分というものを探るために、学生側の方に史料を広げるとしても、特に学生運動の場合は、一大学だけの問題ではない部分がありますので、あまり広げてしまうと大学史の本筋を離れてしまうことにもなりかねないわけです。特にセクトの問題などは広げすぎると必ずそういうことになると思います。そのあたりをどうするかというのも、実際、書く上では問題になってくるだろうと思われまます。

それから、『百年史』の際に問題になった部局史をどうするかという課題もあります。早稲田が『百五十年史』を始めるに際して、その前に慶応義塾が先に一五〇周年を迎えるということで、関係者の方にヒアリングをしました。そのヒアリングの場には私はいなかったのですけれども、後で聞いた話では、慶応では『慶応義塾百五十年史』の編纂というのはやらないことにした、代わりに、事典や史料集を出していくというふうに決めた、ということでした。そしてなぜそのようなにしたかという点、その大きな理由は、組織構成が複雑になってきていて、短期間ではその変遷を把握して記述するということはどうも間に合いそうにない、ということだということです。早稲田はそれを聞いて非常に驚いたわけです。それで早稲田では、もしやるなら相当早くから動かないといけないということで、その慶応の

話を聞いてすぐに準備を進めることにしたのでした。そのようなわけで、部局史というのは本当に細かい変更が多い部分ですので、『百五十年史』の段階である程度それを整理して残しておかないと、二百年の段階になると、もう分からなくなってしまうということがかなりあることは間違いないと思います。

ただ、部局史というのは本当に細かいものですので、三巻構成の『百五十年史』では、そこまで手がまわるのかどうかというのも難しい部分があるわけです。慶応の話を聞いてすぐに取り掛かった『百五十年史』ですが、どうもやはり部局史までは手がまわらない可能性が高いのではないかと思います。しかし、せめてその史料だけでも整えておくことは必須で、そのためには大学史資料センターのアーカイブズ機能を強化する、つまり学内の文書サイクルが確立されて、自動的に各部局の記録がセンターに入ってくるようにすることが必要なのですが、なかなかそれには大学の方が応じてくれないわけで、結局部局ごとに保管して、いらなくなったら廃棄されてしまうということになってしまっているわけです。特に部局の変遷を把握するのに必要な各学部などの記録はほとんど入ってきません。しかし『百五十年史』の第三巻で扱う、設置基準大綱化以降の時期は、大きな機構改革がいくつもあるわけですし、そのプロセスを窺うことができる各学部単位の教授会や各種委員会の記録などが必ず必要になります。しかし、さきほども申しましたように、そうしたものはセンターではもっていません。時折、退職する教員のところに行ってもらってくる史料のなかに断片的に入っている程度というのが現状なのです。こうしたアーカイブズ機能の欠如ということが非常に大きな問題であるわけですが、しかし制度の確立ということを待っていますと、いつそれが実現できるかわからないまま史料が消えていってしまうことになりますから、まずはそうした委員会にかかわっていた方々の個人的な史料をなるべくたくさん集めて、断片的なものであっても集積していつて、そこから探るという方法をとるほかにいように思います。その一方で、アーカイブズの制度化、文書サイクルの確立への運動も同時に行っていかななくては

ならないと思います。

また、こうした史料の不備を補うものとして、聞き取り、オーラルヒストリーというものが大事になってきます。ところが、聞き取りというのは、今生きている人に話を聞くわけですから、当然話の内容についても利害関係を持つ人が多く存命しているわけで、重要なことを聞くためには、外に出さないという条件で話を聞く必要があります。逆に、外に出すことを前提とすると、重要な部分については話せないということになってしまいます。しかし、そうやって秘密の保持を前提に話を聞いたとして、それではそれをどこまでこの『百五十年史』に書いていいのかということは、なかなか難しい問題があるように思います。もちろん、聞き取りだけを取って置いて、二〇〇周年とかそれ以上の段階になって使えるようにするという手段もありますけれども、ただ『百五十年史』ということで考える上では、それをどこまで使っているのかということは、問題となるだろうと思うわけです。あるいは仮に差支えないと考えて使ったとしても、典拠として誰が話したということは書けないわけで、そうなってくると、記述の信用性ということにかかわってくることであり、きわめて難しい問題がそこに孕まれているわけです。

おわりに——「グローバル化」のなかで

いろいろと問題点を挙げてきましたがけれども、最大の問題はやはり、しっかりした編纂体制、特に執筆のための予算と人員を確保できないということだろうと思います。予算がつかない原因についてはいろいろと既に述べましたが、最後に「グローバル化」の問題も、これに大きく関連することとして、触れておきたいと思います。

現在、歴史あるいは過去というものが顧みられない要因の一つとして、先ほど申し上げましたこと以外に、このグ

ローバル化という状況のなかで、とにかく大学がこれから生まれ変わっていかなくてはならない、というような危機感がある、そういう時代状況があるのではないかと思います。そういうなかでは、過去を見ることよりも、どれだけ世界の現状を見て、世界とどう競争するのかというようなことばかりが頭のなかにあるので、過去の歴史なんか振り返っている場合ではない、ということになるわけです。そのようななかでまた早稲田は大きく変わっていくだろうと思うのですけれども、我々は、その変化していく状況というのを横目で眺めながら、そうした変化をその何年かあとに、『百五十年史』の三巻の記述に組み込まなくてはならないわけです。それは非常に難しい作業であり、ともすれば事実の羅列に終わってしまいかねません。そういう問題もあります。

ただ、今の状況をみますと、どうもグローバル化ということが、英語で教える、英語だけで卒業できるコースを作るといふようなこととイコールで捉えられているくらいがあるように思います。外国から学生を呼ばなければならぬ、ということとで、授業を英語化する、という方向性に進んでいるわけですけれども、これをやれば、実際にはどうなるでしょうか。私はただ単に、アメリカの三流大学の下に自ら組み込まれることを買って出ることになる、というのが実情ではないかと思えます。実際に東京大学で、英語だけで卒業できるカリキュラムを作ったところが、その合格者のうちの七割が入学を辞退するという状況になっているらしいですけれども、結局英語で学ばなら、アメリカの大学で学んだ方がいいということに、東大ですらなるわけですね。それは当たり前です。また教員の問題も重要です。たとえばネイティブの教員を雇ったとして、その人に本当に研究能力があるかという点、もちろんそういう方もいるでしょうけれども、本当に優秀で、かつ母国ではなく日本の大学に就職したいという方方は、ごくごく一部だと思ふのです。その結果、どうなるかというと、結局英語で授業ができる、というだけで、研究のレベルは必ずしも高くない、そんな人が来てしまう可能性だってあるわけです。たとえば日本史の世界では、少し前に、ネイティブでは

なく日本人なのですから、ハーバードで一番人気がある授業だとかというようなことを売りにした新書版の本が出ました。その本の内容は、日本のちゃんとした日本史研究者から見たらまるで荒唐無稽な内容で、全く話にならないということが研究者の間で話題になったりもしたのですが、たとえば英語で日本史を講義できる人というような条件で公募が出されて、公募の審査が公正を期すために専門外の人達によって行われたりすると、そのようなレベルの人が、ただハーバードで実績があるという、それだけで採用されてしまうこともありえないことではないわけです。そういう人を採用すれば、授業は面白おかしくやって場合によっては人気が出ないともいえないですけども、もはや研究能力は世界に太刀打ちなんかできませんし、そのことはその大学のアカデミックスティタスを確実に下げることになると思います。

このような流れの背景には、いわゆる大学ランキングの横行などという状況もかかっていると思います。つまり、そうしたランキングは英語圏中心のものが多くので、英語で論文を書いたりしないと、そのランキングに加算されにくいわけです。それに加え、理系の方が研究費も多いですから、理系の強い大学ほど上位にくるという事情もあり、理系を強くして人文社会系は軽視する、という流れもそういうところに発している部分もあると思います。ただ、私はそういう表面的な、ランキングみたいなものを過度に気にしてしまうと、逆に早稲田らしさというものが失われて、所在は日本だが位置づけはアメリカの三流大学、四流大学というような形になって終わるだけだと思います。それだったら、たとえ日本語でしか授業ができなくても、優秀な日本人研究者を揃えて、その教員の授業なり著書なりを翻訳できる翻訳者を雇って、それを世界に発信する、というほうがまだマシだと思えます。

少し話がそれてしまいましたが、何を申し上げたいかというと、かつて、周年事業に際して、早稲田大学が自校のアイデンティティの確立を図り、その一環として年史編纂も存在していたのだという事実を想起すべきだと思うので

す。その当時の早稲田の経営者たちは、大学ランキングの順位を上げることなどを考えていたわけではありません。最終的には帝国大学と勝負することも考えていたでしょうけれども、それは単一の評価軸で勝とうとかそういうことではなくて、彼らが考えていたのは、まずは早稲田を帝国大学とどう差別化するか、ということだったわけです。早稲田が早稲田として目指すべき教育とは何か、単に帝国大学の劣化コピーのような大学であるなら存在する意味はないのであって、帝国大学にない早稲田の独自性をどこにつくるのか、学生にとって早稲田で学ぶメリットというのがどこにあるのか、ということ、社会の状況をしっかりと見ながら、単にカリキュラムだけでなく、学風のような面まで重視して、模索していたということなのです。

大学ランキングというのはいわば単一の物差しです。その物差しでは、たとえば大学の個性、学風というようなものは全く考慮されません。そしてこのこと自体、大学の歴史を学んではじめてわかることなのですが、そうした個性、単一の物差しで測れない部分こそ、創設期から大学昇格までの早稲田の経営陣が苦心して作り出そうとしていた部分なのです。ですから、その原点に返って、やはり早稲田というのはなんのためにあるのか、日本で、そして早稲田で学ぶことの意味とはなんなのか、そこを考えないと、世界から学生が集まってくることはありえませんが、結局は日本の学生にもそっぽを向かれてしまいます。もちろんランキングに影響される受験生もいるでしょうから、そこはそこで上げていく努力は必要でしょうけれども、それだけではだめで、絶えず自己と自己の置かれた状況の再点検をしつつ、そもそも早稲田というものがどういう状況のなかで誕生したのか、そして歴史の変遷のなかでどのような学風を培ってきたのか、それを受け継ぎつつ提供できるオリジナリティとは何か、それを社会の要求、需要といった部分を考慮しながら認識していくことが必要で、大学の年史というのも、そうした大学のオリジナリティを考える際のひとつの材料として、必要になってくるわけです。

ただ、これもまた両刃の剣という側面もあって、さきほども申しましたように、あまり大学のオリジナリティ、アイデンティティという部分を強調しすぎると、一種の「早稲田ナシヨナリズム」のようなもの、手前味噌のようなものになってしまいかねない部分もあります。ですから単に自分の大学を褒めるだけではダメなのだろうと思います。グローバル化のなかで競争が激しいからこそ、ますます負の側面を直視しなくてはいけないし、自己点検をしつかりとやらなければならない、そのためには大学にとって都合の悪い部分もちゃんと書かなくてはならないわけです。もちろん、記述に価値判断は極力入れてはならないと思います。価値判断はあくまで読者に任せる。しかし、事実は事実として、出したくないと思う事実でも、事実としてこういうことがあったということはしっかり書いておく。それが大事だと思います。そうでなくては、自己点検の材料にはならないだろうと思います。

とはいえ、さきほども申しましたが、こうした意味での必要性をどんなに説明しても、短期的な効率性や即効性ばかりが求められる世の中になってきていますから、分かってくれる人は少ないかもしれません。国立大学の人文社会系の縮小再編問題が物議を醸していますけれども、この年史編纂の置かれた困難な状況というのは、この問題と深くかわつてくると思います。ただ、それでは、日本がグローバル化のなかで目標にしている欧米の一流大学が、歴史を軽視しているかといえば、必ずしもそうではないわけで、日本の大学では考えられないほどに立派なアーカイブズを備えている大学はいくつもあります。こういうことを、欧米の大学はどういう理由付けで行っているのか、さきほどから述べているようないろいろな課題を海外の大学はどう解決しているのか、そのようなことを、日本国内だけではなく海外にまで視野を広げて、探っていくことが必要だろうと思います。私自身そのあたりには無知なので、具体的なことはいいないのですけれども、これからはそういう形で、いわばグローバルな論理によって俗流「グローバル化」論に抗する、ということが必要になってくるのではないだろうかと思うのです。そのあたり、おそらく今お集ま

りの皆様のなかには情報をお持ちの方もおられるのではないでしょうか。海外でなくても、うちの大学ではこういう課題をこういうふうに解決していたとか、大学側をどう説得していくのかというようなことについても、おそらくいろいろとご存じの方がおられるのではないかと思います。そうしたことを、ぜひ、この後のお時間にでも、ご教示いただければありがたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

【追記】 本稿は二〇一五年六月三日に早稲田大学で行われた全国大学史資料協議会東日本部会での講演筆記に加筆修正を加えたものである。また本研究はJSPS科研費（課題番号二三七二〇三三〇）ならびに二六三七〇八〇二）ならびに早稲田大学特定課題研究費（課題番号二〇一四K六〇七四）による研究成果の一部である。